資 料

ソヴェトの生活指導について*

静岡 大学

北 脇 雅 男**

I

ソヴェトの教育に、生活指導があるかどうか。この問題は、われわれだけでなく、アメリカあたりでも相当に関心をもっているようである。わが国とアメリカでは、生活指導の概念にかなり異なる面がある。ソヴェトのそれともやはり相違のあることは、推測にかたくな。元来、生活指導は教科の学習指導と異なり、intangible であるから、その国の教育活動のなかから、これこそ生活指導である、と指摘することは困難である。したがって、ある論者⁽¹⁾のように <ソヴェトの教育学の概念のなかには、生活指導ということばはない>と簡単にいえるかどうか。英米の学者のなかにも、ソヴェトの生活指導については意見がまちまちである。これは、生活指導の受けとめ方が、ひとによって異なっているからである。

たとえば、アメリカを中心とする Soviet Comparative Education Field Study Group が 1958 年ソヴェトを訪問したことがあつた。その一行のハイスラー(Heisler, F.)⁽²⁾とガス(Gass, G. Z.)⁽³⁾の報告では、ソヴェトの生活指導の存在をみとめながらも、その表現上のニュアンスにはかなりの相違がある。

わが国の生活指導は、アメリカのガイダンス理論を背景として発展してきたものであるが、その歴史的系譜からみて、ガイダンスと異なる教育作用と考えられている。これを、アメリカの民主主義的なガイダンスの理論を基礎とするか、ソヴェトの集団主義にもとづいた人格の全面発達を展開させる教育実践と解釈するか。また、学校教育における領域概念として理解するか、それとも機能概念の立場にたつかによつて、生活指導の意味がかわってくる。そこで、ソヴェトの教育実践を検討して、そこから生活指導のあり方を導きだすにしても、教育哲

学のジャングルに踏み迷えば、とうてい簡単に述べることはできないし、またその論者がどの立場にあるかによつて、意味構造が異なることはいうまでもない。

II

フルシチョフ提案によるソヴェトの教育改革で、生活指導のあり方も変つたことと思うが、いまこれを理解するために、その歴史的系譜について簡単に述べておきたい。

ソヴェトでは、1917 年⁽⁴⁾の十月革命以降、外国の心理学の理論や技術が移入され、産業界には適性検査が工夫実施されるし、学校には児童学者が配置されて、ガイダンス技術と目される教育技術が産業と学校の 2 つの社会におこなわれていたことは事実のようである。この児童学者のしごとは、学校管理や教育実践にもわたり、広範なものであつたが、その主要なものをあげると⁽⁵⁾、(1)生徒の学業不振の理由を決定すること、(2)卒業生の将来の職業配置を決定すること、(3)学業を維持することができない生徒を退学させること、であつた。これをみても、ソヴェトでは児童学者の手によつて生徒を個別的にテストをしたり、職業選択の指導を実施していたと信ずるに足る教育実践が営まれてきた。しかし、学校指導のうえにいくたの偏向を犯し、しだいに積極的な支持を失い、1936 年ソ同盟共産党中央委員会の決定により、児童学者もテストも廃止されてしまった。

この決定は、ソヴェトの教育展開を知るうえに重要であるばかりでなく、わが国の生活指導を理解するうえにも重要なことである。たとえば、わが国では、職業指導主事や生徒指導のカウンセラーがそだたないのは、わが国教育界の独特の事情ばかりでなく、なにかペドロジスト廃止の理由と原理的なつながりがあるのではなからうか。さらに、またここで注目しなければならないことは、テストにたいする激しい批難とテスト計画の廃止である。

昭和 21 年 3 月、アメリカ教育使節団はわが国にテスト

* On the study of life guidance in the Soviet Union.

** by Masao Kitawaki (Shizuoka University)

計画にもとづいて教育計画を、生徒の個人差に適應させることを勧告したことがあった。以来、テストは職業指導、教育指導、学習指導さらに学級経営にまで利用されていることは周知のとおりである。そこで、ガイダンスとテストとは密接不可分の関係になつて、ガイダンス活動を成立させる重要な条件となつてきた。

ここでいうテスト計画とは、正常な個人を測定するために組織によつて駆使されているテストの規格化された使途である。また、組織的に用いるテストは、慎重に詳細にわたつて立案され、学校のすべての正常な生徒が完全にそれに参加する計画のもとで定期的間隔をおいて実施するものである。

ソヴェトにも、ガイダンスの技術としてテストが、これまで計画的に受けられていたことは疑いない。しかし統計的平均人からは、子どもの歪められた概念が得られるだけである、といつて、激しい口調で批難して、廃止してしまつてゐる。最近では、アメリカでもテストやテスト計画については厳しい反省もあるから、ソヴェトの言い分も理由のないことではない。

スミルノフ(Smirnov)⁽⁶⁾は、子どもの発達にはテストのような統計的規準ではただしく測定できない。もし、これを正確に判断しようとするならば、子どもの活動を動機づけるモチベーションや態度をつくりだす諸条件のもとで研究する必要がある、と述べている。能力、動機、態度が不可分割的である理由として、かれはひとりの子どものことについての実験例を引用している。スラヴィナ(Slavina)⁽⁷⁾は、学業不振児は教育訓練が適切でないために生れた知的に不活発な子どもであるから、子どもの精神活動のある路線に沿つて組織化すれば治療できる、と信じている。そして、このような教育上の欠陥は、アメリカではカウンセリングの問題だと考えられていたことが、ソヴェトでは、教育上の問題であつた。

ここにおいて、ソヴェトの生活指導には集団指導はあつても、個別的指導はみとめられない。学校教育、家庭教育、就職指導についても党と政府によつて統制されている。ソヴェト指導者たちの主要な責任は、生徒を集団のよき成員として教育することである。生徒は教師やコムソモールやピオニールのリーダーの指導のもとで、集団判断に服さなければならない。こうなると、アメリカ人が考えてきたように、教育目的は生徒個人の自由にゆだねる、といつた考えと異なるから、職業指導も教育指導も人事指導もない。人間の潜在能力を強制と競争によつて、集団、労組、青年組織あるいは市民の生活にふれたあらゆる機会によつて採掘するのがガイダンスである、といつた歪められた批難もある。

Ⅲ

職業指導 ソヴェトには、ガイダンスに当たることばとして *ориентация* がある。これが *life guidance* とか生活指導といつた独立した教育作用として使われているかどうか。わたくしの知るかぎりでは、職業選択 *Выбор профессии* の指導というように、＜職業＞の形容詞を冠して、*Профориентация* として使われている。

職業指導の前提には、もちろん職業選択の自由がなければならぬ。シビゲリ(Шпигель)⁽⁸⁾は、最近の論文(1960)のなかで、この点を強調しているが、その要旨はつぎのとおりである。

資本主義国家の青年たちには、自由な職業選択のための約束はない。慢性化した失業者大衆、階級組織の教育や高物価のため、未発達な社会には自由な職業選択は制約されている。ところが、社会主義国家の若者たちのまえには、ひろい水平線と大きな可能性とが開かれており、職業選択は社会的には決して制限されていなかった。だが中学や高等教育における、ある特殊な教育体系が、最近まで現実の自由な職業選択における制約となつていたし、普通教育と総合技術教育の視野の狭さが職業選択の自由を制限し、この選択は偶然におこなわれていた。いまソヴェトでは、建設の途上にあるため、職業選択の自由のための基本的前提はことごとく用意されている。

この点、フルシチョフ提案のなかでも、わが国の青年の職業選択は大多数の場合は、ゆきあたりばつたりである、ことを指摘している。

ともあれ、この職業選択の指導は道徳・性格教育や総合技術教育とも密接な関係があるため、ソヴェト教育学教科書にははやくから採択されているし、最近では、すぐれた論文も数多くみられる。いま雑誌、論文集のなかから職業指導に関するものを紹介する。

雑誌『学校と生産』⁽⁹⁾ 1月号, 1960年(ロシア共和国文部省発行)

- (1) Ь.ф. ライスキー: 職業準備課程の選択について
- (2) Ю.И. シビゲリ: 生徒の職業指導および職業相談について

- (3) Р.М. ミケルソン: 生産教育組織におけるもつとも重要な諸問題

雑誌『ソヴェト教育学』⁽¹⁰⁾ 2月号, 1960年(ロシア共和国教育科学アカデミヤ)

- (4) А.Н. パルコルスキー: 諸外国の労働教育における職業指導と職業選択の問題について

- (5) О. И. ガルキナ：8年制学校の職業指導科について

『労働心理学会講演報告』⁽¹¹⁾ 2月号, 1960年, (ロシア共和国教育科学アカデミア発行)

- (5) H. A. レヴィトウ：職業に関する心理学的研究

- (7) K. K. プラトノフ：職業適性の諸問題に寄せて

- (8) C. H. アルハンゲリスキー：生産の先駆者と革新者の労働活動の心理学的特性

『ロシア共和国教育科学アカデミア報告書』⁽¹²⁾ 1957, No. 2

- (9) M. A. フォミトヴァ：生徒の職業選択におよぼす総合技術教育の影響について

『心理学会大会講演報告』⁽¹³⁾ 1959年, (ロシア共和国教育科学アカデミア発行)

- (10) K. K. プラトノフ：夏期労働の心理学について

- (11) M. A. マズマニアン：アルメニア地区における職業相談および職業指導活動の組織に関する若干の問題

昨年2月以来、研究上の通信を交換するようになったウシンスキー図書館のユリー・ヌージン氏 (Yurii, Nudzin) からは、日本の職業指導について、つぎのような照会が著者あてにあつた。これをみても、この種の指導にたいするソヴェトの熱意がうかがわれる。

- (1) 戦前および現在の職業指導の代表的学者の氏名
- (2) 職業指導の歴史
- (3) 職業指導をおこなうに当たつて、階級的な差別が存在するか。
- (4) テストの役割
- (5) 職業・家庭科の教員の養成と再教育
- (6) 就職後の指導の具体的措置
- (7) 中学校における職業選択の指導に当たつて、適性や興味をどの程度に重視しているか。
- (8) 学校における職業相談の実態
- (9) 工場訪問
- (10) 私立中学校の職業指導の特色
- (11) 公共職業安定所の職業相談のやり方

課外活動 課外活動⁽¹⁴⁾は、学級外活動Внеклассная работа と校外活動 Внешкольная работа とにわかれている。これらは、いずれも共産主義的モラルや愛国心をたかめ、相互に学習、労働、社会活動を助け合い、あらゆる国々の労働者に向かつて友情、尊敬の精神をふかめることである。

さらに道德の育成には、生徒の個人的興味、創造的潜在力、独立心、積極性、趣味をふかめ、実際の活動では学校や校外でおさめた科学や技術を応用する能力を養

うことである。いわば、知識や技能をふかめ、その限界をひろめ、子どもの余暇をじょうずに組織化して、カリキュラムを補足したり、学校を援助する活動である。

カイロフの説明では、課外活動は社会主義社会が要求する普通教育と総合技術教育、つまり人格の全面的発達を実現し、また実際の活動を目ざしての生徒たちの準備を実現するためには、文化のいろいろな組織において生徒たちの自主的活動を組織することである。

課外活動計画を効果的に運営するためには、ピオニールやコムソモールなどの生徒集団の力にまつところが多いし、そのリーダーは父母委員会や学校と協力して、各種の指導に当たることが必要である。このリーダーは、ソ連指導者の前衛的な役割をはたしていることはいうまでもないが、生徒の進路指導や教育指導のよい助言者であるし、家庭における個人的問題を解決するよき理解者でもあるようである。

教授 課外活動における指導をみると、道德指導、訓育、社会指導、教育指導、職業指導など人格の全面的発達の実現を目ざしているもののようで、その具体的実践活動はハイスラーの報告でもだいたいのことがわかる。しかし、そのような指導の中核となる活動は、ソヴェトでは教授の全過程⁽¹⁵⁾にある。カイロフによると、道德教育は生徒の学習労働と教師のその指導とが相まつて完成されていくもので、科学の基礎を学習することによつて人生における正しい方向づけが与えられるものである、といっている。

教授は、原則として集団の形態をとつているから、指導は集団主義の精神でおこなわれるようになる。したがつて、ガスがソヴェトでは、カウンセリングの問題だと考えられたものが教育上の問題であるから、モスコフ、レニングラード、タシケントなどの大都市の学校には、フォーマルな意味ではガイダンスはない、といっている。フォーマルな意味とは、教科の学習指導に平行した教育機能としてのガイダンスはない、と解釈できるのであるまいか。

ヌージン氏が、筆者に最初に照会してきたことは、最近の教育改革により諸外国の生活指導の諸問題がどのように解決されているかを知りたいが、日本では学校教科の学習のなかに生活指導がどのように織り込まれているか、ということであつた。

また、グリヤノフはかれの最近の論文のなかで、小・中学校の労働訓練にふれているが、生徒は産業の各種の職業活動にたやすく習熟して、一般知識、技能、能力をおさめることと労働愛、活動、才知、独創力、産業活動や集団にたいする責任感などの人格特性を養うことが、

その訓練の全過程のなかで要求されている、と述べている。

メンチンスカヤ Menchinskaya⁽¹⁷⁾ は、教授心理学のなかで、つぎのようにいつている。ソヴェトの子どもたちが学習するときには、その目的を自覚して、できるだけそれに向かつて努力することである。このような態度こそ、知識を獲得する過程において大事なことである。したがって、学習の質をたかめるには、安定した、かつ社会に必要な動機を育てることである。

オゴロトニコフとシンビリョフ⁽¹⁸⁾ は、教師は教授過程において知識を伝達し、同時にその知識を生徒がみずからのものとする過程を指導することで、いわば指導としての教授を重視している。

以上の考えをまとめてみると、ソヴェトの教育は、集団主義教育につよく支えられているから、＜指導＞が教科の学習を歪めることなく教授過程に融けこんでいる。そのために、教育学、心理学の教科書や論文集などには、生活指導に相当することばがみあたらないのではあるまいか。これに反して、＜職業指導＞ということばは、前述のように容易にみ出すことができる。

相談助言 集団教育は、相談助言という個別的方法を決して否定するものではない。相談助言⁽¹⁹⁾ とは、生徒とひとりひとり相談することで、対話、助言、指示とから成り立っている。

個別적인におこなうばあいもあれば、集団的なばあいもあるが、学校の授業後におこなっている。

相談助言を専門とするものをコンシリエラントといつて、現在の職業や生徒の要求や能力について十分な知識をもたなければならないが、その要領はつぎのとおりである。

(1) 指示は、重軽工業の各種工場、集団農場、国营農場、私企業、公共機関の順序による。

(2) それから、職業ごとに青少年の労働の必要度に応じて指導する。

(3) 生徒は、自分の職業上の進路や興味が当該地方の地域内で満足することができなければ、生徒自身は自分の能力に適したものを探することができる。

(4) 生徒が、仕事についてどんな要求をもっているか、健康についてどんな要求をだすか。仕事について、どんな反対意見をだすかを理解しておくことが必要である。

(5) 精神物理的特質や能力が、当該職業のために必要であるのか。どんな処置が、この特質を職業活動の過程において発達させるかを理解していなければならない。

IV

ここでは、簡単にカウンセラーの任務を紹介したが、これをみてもガイダンスの存在を否定するところか、その盛大さを十分うかがうことができる。しかし、ガイダンスの組織的活動としては、指導も相談も職業指導が中心ではあるまいか。職業指導そのものの歴史的系譜からいつても、また共産主義社会の建設という統一目標を志向して、労働のもつ創造的役割を重んじていることから、さらにまた、ソビエトの若者たちの全面的発達と自発的職業選択を援助することからも、当然である。

最近では、人格心理学⁽²⁰⁾ の研究もさかんて、これが人格指導の基礎づけとなつていっているが、その指導が生指導として組織づけられた教育実践としておこなわれているかどうかについては、簡単に結論づけることはできない。

文 献

- (1) 高浜介二：生活指導の方法的概念。生活指導，昭35，12月号。
- (2) Heisler, F. : Guidance practices in the Soviet Union. Personnel and Guidance J., 1959, Vol. 38, No. 1.
- (3) Gass G. Z. : Guidance in Russia. Personnel and Guidance J., 1959, Vol. 38, No. 1.
- (4) Gass : ditto, p. 34.
芝田進午：社会主義と労働心理学。応用社会心理学講座，第1巻，p. 399
- (5) Gass : ditto, p. 34
矢川徳光：ソヴェト教育学の展開。春秋社，1952.
- (6) Simon, B. : Psychology in the Soviet Union. 1957, p. 187.
- (7) Simon : ditto, p. 205.
- (8) Шпгелъ Ю. И. : Профессиональная ориентация и профессиональная консультация учащихся. "Школа и Производство" 1960. Стр. 20.
- (9) Школа и Производство, Январь. 1960.
- (10) Советская Педагогика, No. 2, 1960.
- (11) Тезисы Докльдов На Совещании По Вопросам. Психологий Труда. 1957.
- (12) Доклады Академии Педагогических Наук. 1957.
- (13) Тезисы Докладов На I Съезде Общества Психологов. 1959.

- (14) Bereday, G. Z. F. and Pennar, T. : The Politics of Soviet Education. 1960, p. 132.
 - (15) イ・ア・カイロフ他著, 矢川徳光訳: 教育学Ⅱ. 明治図書, 1959, p. 24.
 - (16) Gurijanov, E. V. : Some Problems of Labour Psychology and Labour training. 1958.
 - (17) Simon : ditto, p. 190.
 - (18) オゴロトコフ他著, 福井研介他訳: ソヴェト教育学. 青銅社, 1953, p. 133
 - (19) Щигель. Стр. 20.
 - (20) 城戸幡太郎: ソ連及び中国における心理学の研究. 教育心理学研究, 1956, 4, 44~47.
- ここに引用したソヴェトの文献は教育科学アカデミヤの Yurii, Nudzin 氏から贈られたものである。厚く謝意を表する。
- (1960年9月20日原稿受付)
-